

▲第二回特別企画展 3月24日(土)〜5月6日(日)
「作家の自筆原稿でたどるへ文学・青春」展



「青春」をテーマに、約七十名の作家と作品を紹介。青春を描いた作品や、作家が青春時代に執筆した作品を、一九二〇年代以降の文学の展開に沿って展示しました。川端康成、三島由紀夫、太宰治といった文学史に名を残す作家から、大江健三郎、高樹のぶ子、村上龍、山田詠美など現在活躍中の作家まで、普段目にするのではない貴重な自筆原稿が一堂に会しました。

展示資料約二〇〇点
入場者数二七六四人(イベント含む)

++++++
高樹のぶ子さん講演会
「文学と青春」
4月17日(火)

++++++
本展において、芥川賞受賞作「光抱く友よ」の自筆原稿が展示されたことにちなんで、高樹のぶ子さんにお話しいただきました。聞き手は文学館館長・佐木隆三が務めました。また、北九州子ども読書交流センターの仲紀子さんに「光抱く友よ」を朗読していただきました。

◆◆◆

佐木 高樹さんは戦後生まれの女性として最初に芥川賞を受賞されたんですね。何年か前、金原ひとみ・綿矢りさの最年少同時受賞が話題になりましたが、高樹さん自身は遅く書き始めたんですね。

高樹 人生と格闘するのに必死な二十代で、書き始めたのは三十代。離婚したり子どもの問題もあって、世界を敵に回したような、背水の陣という意識で書き始めました。デビュー作「その細き道」が芥川賞の候補になったのが三十五の時。その頃ようやく再婚もかなって一応人生を再建できました。その二年後芥川賞を頂きました。

佐木 私の妻は、私の書いたものを全く読みませんが、高樹さんのところはいかがですか。

高樹 うちは読みます。主人は小説好きで、私に送られてくる雑誌も読んで面白かったものを教えてくれる。

佐木 ご主人は法律家だから社会のことよくご存じでしょう。

高樹 小説の好き嫌いについては、そのことはあまり関係ないようです。私は常にクリエイティブな生活を送ってるけど、あちらは社会の後始末ばかりしてるっていう。ところで、アメリカみたいなのに、全てが訴訟の社会になるのは人間としてはどうなんでしょう。裁判員制度が始まると、人ごとではないですね。

佐木 私は裁判員制度というものに期待しています。硬直化した司法に風穴が空くのでは。

高樹 でも私は守秘義務って無理です。小説家は心で抱え込んだものを出してしまううら。

佐木 守秘義務に反した場合にペナルティーがあるのが納得できない。司法関係者が怖れているのは、職業裁判官の発言をばらされることらしい。

高樹 人間の真実は単純ではないですよ。文学は表に現れないものを解き明かしたり、曖昧なものを人に伝える事ができますね。

佐木 さて、高樹さんは芥川賞

++++++ 来館者の声 ++++++

◇ 予想通りの字であつたり意外な筆跡であつたりして楽しかった。(二十代女性)

◇ 茨木のり子さんの自筆で「自分の感受性くらい」を見て、ずっと好きだった詩なので涙が出ました。(四十代女性)

◇ 見ごたえがあつて満足しました。改めて読み直したい本がいくつかありました。(五十代女性)

◇ 二度と拝見する事はないと思うと、一つ一つを丹念に見ました。このような企画を何年かに一度はして頂きたいです。若い方に見て頂くと良いのではないかと思います。(五十代女性)

◇ 読書量の多い学生時代を思い出し、楽しく拝見させて頂きました。(五十代女性)

◇ 日本文学の名だたる作家の自筆を見て感動を覚えた。(六十代男性)

このほか、たくさんの回答を頂きました。ありがとうございました。